

〔翻 刻〕

『下野州岩船山緣起』(全一卷)

01 下野州岩船山緣起

夫當山開闢者仁王四十九代光仁天皇御宇
寶龜年中伯耆國大山有練行修善沙門

欲見地藏菩薩正躄而祈求大山權現年尚矣

05 一夕夢弊衣縑縷老人告曰地藏無於此山

自是東方下野國有從金輪際出生之山号

岩船山正身地藏在于彼山語了不知所去

夢忽醒矣沙門歡甚踊躍便負竹笈着草

鞋發足行程不恙漸至東野州而尋竟

10 彼靈名之山其鄉人指曰東北之層巒

是彼勝地也於是卸笠拭目仰望則怪

巖高聳松老蘚茂而雲霧覆峯實塵

外無雙之勝境也唐人詩所謂白雲

似帽覆山頂青苔如衣懸岩肩者乎

15 弥信夢想之通氣展權毘之眉凝渴仰

之膽近到山之趾見有少草庵束松葉為

牆編柴荆為廡草門半傾庭草就荒幽

邃寂寞也日既向迫晚懇請設宿主者

老齡之下僧也挑柴戶延沙門於廬內

20 進茶設饗後問往來所由審詳說多年

夙志并夢之感下僧曰斯山上時之有靈

應明日必影現之期也沙門不勝感喜

點禱_而之後人來敲門呼曰地藏坊

在乎明日可畊田來把牛鼻繩否又人未田

25 地藏坊在乎明日可膏屋來可誅茅根否

又人來曰明日可造家來可膏否下僧一々許

諾沙門先聽呼地藏坊之名偏生恭敬心

閉目思惟同日可辨餘多之所作不思議

也黎明以種々飲食施与于沙門曰一日

30 在世而不順人情者家資難給即出去矣

其後沙門飲食訖圍視山麓之民呈農

村有把鼻繩所有誅茅根所有膏屋所

一人三所分身三所一躄也點歎而歸草

庵矣日又迫暮色寒鴉歸林遠鐘聲罷後

35 下僧還來疲困而卧矣晨朝起倡沙門尋

九折徑躡巉岩攀薛蘿漸到山上向此

峯可佇立菩薩出現所云了下僧立絕巔

之寄絕吾躬自頂至脚跟一身左右相分

一分便等身地藏大士難見難思妙牀光

40 耀朗徹譬如明鏡写万像三界六道色相

無陰覆分明顯現妙經所謂一切諸群萌

天人阿修羅地獄鬼畜生如是諸色像皆於

身中現者乎合掌瞻礼須臾之頃分身与

本身同合共復一形則下僧也相共歸于

45 麓之庵懇志慰愈以白米一箱施賜可為

歸路之糧矣沙門且悚慄且歡懌赴于旧

山其舍主報云些少粳米滿于鍋中甚

奇妙也翌日之晚吹亦復如此不擇鍋釜

大小一手裏米盈溢皆然也見聞遠近無不

歎異也竟遷于伯州舊房招請滿山緇素而

平等施齊各飽箱米之飯鼓腹退矣人々

欸未曾有或乞米或求飯為乾糲持者往々

有之也沙門又引撰信心修善同侶數輩

再往詣岩舩山則山石草木如旧而無庵室下

僧又不見問訊鄉人云相謂久住當村未知

有此異事云若有信心者即見諸佛身

豈可疑乎尔来相繼佛閣僧房寶塔鐘

樓漸宮之經之庶民如子来合力遂成大伽

藍号岩舩山高勝寺仍緣起如斯

60 此岩舩山地藏薩埵者我寺大山寺之与本尊一躰分身之旨

傳聞焉年未參詣之志雖有之不得時默止矣然處寬文

丁未卯月 大猷院殿就御法事日光登山之砌經歸路於佐野

鄉里攀此山拜尊像祈二世悉地矣爰別當遵海自疇昔所有

緣起持未而令見之即閱紙筆破壞鳥跡不正文字轉誤烏馬有惑

不堪嘆息新思令書寫以歸寺既以權大納言通茂卿中院啓照高院宮道

則被染紫毫仍此山令施入畢

伯州大山寺學頭兼檀那院

寬文十庚戌年三月十五日

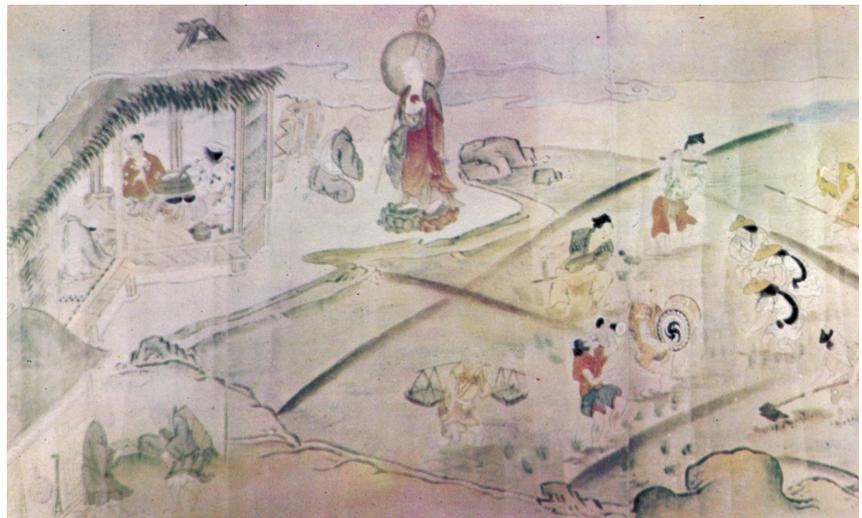
僧正胤海

大智明大權現本地地藏菩薩



伯香國大山寺

大智明大權現本地地藏菩薩
御影 (宮島コレクション蔵)



大山寺緣起繪卷

(佐々木一雄氏編『大山寺緣起』〈昭和46年1月, 稲葉書房〉より転載)

〔翻 刻〕

『岩船山地藏菩薩縁起』（全五卷）

岩船山地藏菩薩縁起 第一（題意）

01 下野州都賀郡駒場郷岩船山來由

夫それ鷲峰の覺月已に雙樹の陰にかくれ

龍華の慧日あかつきまた三會の曉あけにいたり給はず

如來の大悲遠く是を悲哀まし／＼切利天上

05 にて御法みのりを説給ひし吋等覺十地の大士其

數多き中に此界に甚た有縁なるのミならず

特に大悲闡提せんたいの誓願は文珠普賢觀音彌

勒も及はせ給はぬ故をもて地藏薩埵に

二佛中間の衆生を付屬し給ふ故に古徳

10 も所謂ル付屬當レテ身ニ懷キ雅子ヲ於忍辱ノ衣ニ本誓

徹レ肝ニ温ム孤獨ヲ於大悲ノ膚ニとハ稱歎し給へり

これによりて三國の感應永く絶やらずわきて

吾朝におゐて國この靈蹤また枚挙しかたし

其中に下野州岩船山の應現日々月に

15 現當の利物掲焉なり其來由を尋るに

此山を岩船と名る事は薩埵影向の所とて

豎三四間に横九尺はかりの船の形せる岩あり

この岩のほとりに東方にむかへる右の足の印

紋あり其由緒をしらす然るに河内國生あ

20 駒こまの靈峰は本朝開闢の始め天神地神共に

降臨の地なる事舊記に見えたり河府沙

門李叟橋の故實記に云地皇氏第三ノ主尊ミヌシノミコト

アマツヒコホニニギハヤヒ天降彦々火瓊々杵ミコトスナハチ尊ノ酒ミ明星地藏之應化ナリ也

尊受ニ玉ヲ勅ヲ於祖神天照皇ニテレ時龍ホシノヤドリ舍甲午初テ降ニ

25 化ク于日向ノ國襲之高千穗峰ノニ未レ幾ホ尊又駕ニ天アマ磐イ

船フネ於碧漢ヲ令ニ天ノ鈿女ニ執ト纜ト焉カ鞞カ翔カ山戸國生イ

駒般若コマ嶽ノ上ニ垂レ玉ヲ跡ヲ於此ノ地ニ即チ磐船大明神是ナリ也

天鈿女ヘ者即チ末社ノ早方明神ナリ也尊勅ニ云ク却後百

八十萬年ニ有リ大上根機ノ者一踏ニ此ノ嶽頂ニ驅シ鬼神一

30 當ニ良ノ嶽ニ背ニ安ニ措セン朕ガ之ニ本身一云ク神之代も人の世に

移りおほきミも五十代に近き頃役ノ優婆塞茅

原の小角此峰に修練せらるゝ時二鬼を驅使し

一刀三禮の地藏尊を彫刻して安置し給ふ今

35 山崎の地藏堂是也これなん天鈿女尊の懸記し

給ひぬる大上根機の者と社覚ゆれ九瓊々杵尊と

申奉るは日域開闢御主にて國を饗給ふ事三

十一萬八千五百四十二年と見えたり然るに今此靈

峯も河州生駒の如く岩船ありて薩埵影

向の靈蹤なれば彼尊應現の舊跡なる事掌

40 を指すか如ししかのミならず生駒の北方に當りて

大石の上に左の足の印紋あり野人村老相傳

へて瓊々杵尊の遺のこしたまふ御足の跡とそ

云める昔時の靈告は知らされとも口碑ひ今に

消せねは壱州の岩船に右の足跡あり河州の

45 岩船に左の足跡あり左右は是生佛二界を

表示する事なれば日域の衆生を化益したま

はんの御心よりして此靈蹤をとゝめ給ふなる

へし特に右はこれ佛界なるを此山に此跡を

尔し給ふ事甚た深き所以あるへし後の世に

50 佛法東漸して吾妻の鄙の迷徒にいたるまで

本身薩埵の化導にあつかる事を遙に鑿

たまふに非してなんそや又本願經を拜讀す

れは東方有リ山脈ノ曰ニ鐵圍ト其ノ山黒邃ニノ無シ日月ノ光一

55 有ニ大地獄ニ號ニ極無間トと侍れば御足の東方に

向へるは幽迷の獄苦を救ひたまふの本

誓にも相かなへり天竺國中如來の遊化し

給ふ所種々の聖跡を遺し給ふ中に足

跡有事西域記云ク摩訶陀國波吒釐城ノ精

60 舍ノ中ニ有ニ一大石一上ニ有ニ釋迦跡レ履玉ヲ雙跡ニ長一尺

八寸廣六寸乃至吾レ留ニ此ノ跡ヲ示ニ末世ノ衆生ニ令ニ見ル者ヲ

生レ信ヲ滅レ罪ヲ云云唐の玄奘三藏彼土に至り此

靈跡を靚て圖写し歸り太宗皇帝に

奏して鐫行し後四明の延慶寺に重刊す

65 と見えたりそのミならず本朝のむかしを

尋れば八幡大菩薩は宇佐の境内に雙足

の跡をとゝめ給ひ今現在し聖德太子真至

聖皇も御褥の上に足跡を遺したまひ今

70 神佛の化導轍を同して本迹雖殊不思議一

のことはりあきらけく大悲深重の御恵いとふかき

にあらすやしかれは兩國とおく隔るといへとも

同しく岩船あり同しく足跡ありてともに

75 是地藏大士の靈蹤なれば本朝開闢のはしめ

よりして瓊々杵尊本身薩埵の跡を垂れ

給ふ地なりといふ事疑ふへからず

〔繪①〕 岩船山南面之圖

〔繪②〕 東面之圖

〔繪③〕 西面之圖

〔繪④〕 北面之圖

〔繪⑤〕 山上之圖

血之池 御供所

焰魔堂 籠リ所

冷光堂 籠リ所

護摩堂 十三佛堂

二王門 別當坊

袈裟石 雌龜石

北六道 閼伽水

茶店 山王

常念佛堂

三途河原地藏堂

骨堂

岩船山地蔵菩薩縁起 第二 「(題簽)

001 抑下墅國都賀郡駒場村岩船山地蔵菩薩は

何人の作といふ事をしらす其濫觴を尋ね奉る
に人王四十九代

光仁天皇の御宇寶龜年中伯州大山の

005 麓に一人の沙門あり其名を弘誓坊明願

とそ云ける年來安心堅固にして大智妙

薩埵を信し奉り修善練行甚た勇健

なりき深信のあまり木像畫圖の類は皆人

間の所為なれば何とそして生身の尊容を

010 拜し奉ると祈り求る事淺からず晨昏

御名を唱へて夢にたもわすれず罪障の雲

おほひて實相の月明らかならざる事をうらむ

爰に一人の法丈あり語て曰筑紫の竈戸山

寶滿大士は地蔵菩薩とともに濟度衆

015 生の御誓ありときく汝誠にその志あらは

彼所に詣て祈り奉れなとや生身の尊容を

拜さらんやとおしゆ弘誓肅然として此語を

信し即彼山に参り向ふ

〔絵⑥〕

弘誓坊旅行恙なく竈戸山に詣て通夜し

020 て至心に夙志を祈りけるに旅の勞の一睡の

中に端嚴微妙なる女躰弘誓か枕に立給ふて

東方を指さして生身の地蔵菩薩を拜んと

思は、吾妻路に赴き下墅の國岩船山にのほる

へしかならず影向あらん穴賢うたかふ事なかれと

025 宣ふと見て夢さめぬ弘誓歆毘のおもひをなし

御跡をふしおかミ偏に靈告にまかせて東路に

おもむかんとこゝろさし寒暑飢渴をもいとほす

雲山瘴海をも勞とせず千里一翫の心地して

急きし程にやかて下野州に至り岩船山の麓

030 に着くかゝる折節艸刈わらハの通りしに逢

て岩船山はいつくそと問へは此童旅僧の顔を

つくくくと打なかめ吾此業にかゝりてしはしの暇

もおしけれと御僧のありさま誠に遠く來り給ふ

と見ゆればもたしかたしとて岩船山を指さして

035 いとねんころにおしゆ

〔絵⑦〕

明願よろこひあなたこなたと山路をたとるに

はや黄昏になんくとして行道もさたかならされは

いさや此所に止宿して明なは山に登らんと

おもひ民家に立寄かりのやとりを求むれとも

040 慳貧放逸の情もしらざる鄙人なれば弘誓か

旅やつれのわつらはしげなるを見ていかなる

わさはひや出来ぬらんとあやぶみて宿をかさんと

いふものなかりけり爰にひとつの艸菴あり

045 軒端は霧の煙に破れ柴の編戸に竹の垣

かゝるいふせき所にも住めは社すミけめと

さし覗き一夜のやとりを求めけるに主の法師
弘誓をつくく見て能こそ尋ね給ひつれ

050 志のおはして何地より此所ねんころにハ來りたまふやととふ
弘誓しかくのよしを語れはあるしの僧大におとろき

たる氣色にて我此岩船山におゐてよりく菩薩
の影向有るを知れり餘人更にする事なし毎月

18日廿四日にはかならず此山に出現ましますなり
旅僧の信願無二なる事をする我廬に暫時と

055 まりたまへ拜ませ申さんといふ明願奇異の思ひ
をなし爰にとまりて心静しづかに菩薩の宝号
をとなへてそ居たりける

〔絵⑧〕

爰に又人來りて柴の戸ほそを敲く音す何事

060 やらむときけは地藏坊いますやととふ伊賀坊宿に
ありとこたふ彼者云けるは明日田をたかやさんと

おもふ御坊來りて牛の鼻綱はなづなをとりてたへと

頼むいとやすき事なりと答ふ又人來りて明日

065 家を膏へくおもふ萱の根を切て給はらんやといふ
心得たりとうけかふ又人來りて明日家をたてん
と思ふ來りて柱を削る工してたまはれといふ是も

また行へしと答ふ又老嫗來りて明日井を掘

らんとおもふ御僧きたりてほりてたへとたのむや
すきあいたの事夙つとに起行へしといふ明願逐一此

070 あらましを聞いふかしく思ふといへとも子細ぞ有
らんと其夜の明るをまち居たり

〔絵⑨〕

075 既に其夜も明わたれば伊賀坊弘誓坊に告て
曰今我里へ出行也一日も人の為に益なければ
齊料絶て修行成就しかたし又人の為に益
なければ佛道に入の便なしとて庵を出て行ぬ
明願是を聞て誠に道心をすむるの教誡なりと

覚悟し且は昨夜の有様もあやしくおもひ
麓に出てこゝかしこを見めくるに過し夜聞し

ことく伊賀坊牛の鼻綱をとる所も有又ハ萱
の根を剪る所もあり其業中々に尋常の

080 人の及ふへき事にあらず

〔絵⑩〕

又伊賀坊柱を削るにいさおし有ひだたくミの十
人してもかなひかたき程の業を一人にていとやす

けに勤めける弘誓坊あまり不思議におもひ

ける故家ある限りは見廻りけるに姥の來り

085 て頼し家とおほしくて伊賀坊暫時に井を

掘り土を運ひなとして人の助となれりける

弘誓此形勢ともを見るにいと不審もはれやら

すしてもとの庵に歸りけり既に其日も暮

ぬれば伊賀坊も歸り來りて弘誓坊とた

090 佛道修行の物語して其夜も明ぬ

〔絵⑪〕

翌日鳥がねに起き弘誓坊をいさなひ先に立て
山上によちのほるに日いまた出す弘誓に教て曰
あの峰こそ菩薩出現の所なれ至心に掌を
合せて端坐せよ今必影向有へしといひて其身ハ
山の脊へ廻ると見えければ明願は恭敬のかうべ
をかたふけ口に佛名を唱へて影向今やと待居る
所に則地藏坊かすかたにて船に似たる岩の上に

のほり東方にむかひて左右の御手にて頭より
跌の下に至りて引わくるか如くし給ふに忽ち

100 金色の光を放ち地藏大菩薩と現れ無仏世

界度衆生故上求菩提下化有情と唱へ光明

十方を照し其光明の中に三界の有情非情の

像をあらはす事鏡中に萬像を浮か如し弘誓

大に驚仰して感涙袖をうるほし唯一心に瞻

105 禮し奉るしはし程過て地藏坊衣を着する如く

左右の御手をもて衣をかゝけ給ふと見る内に忽ち

もとの下司法師となり弘誓坊をともし道す

からの物語さなから微妙の説法にしてやかて廬に

帰りぬ

〔絵⑫〕

110 斯て伊賀坊弘誓にむかひ汝日來の所願成就

しぬ急き故山に皈るへしとて路次の糧として

白米一舂ほとおくらければ弘誓未曾有の因縁

有かたくおもひ則暇を乞ひたまはりし米を懐

にし飯路に趣き旅宿にて件の米一合程とり

115 出し飯に炊したへとて宿の主に渡し頼ければ

宿主此米をうけとりて餘りに少分なるを嘲哂し

なから大釜に打入炊しけるに大釜に飯充滿し

ければ見聞の人々驚きあへり夫より毎日宿々

にて件の如くなりければ其餘を乞食なとに

120 施し飢たる人をたすけなどしけるに見る人驚き

聞人信を増さるはなし既に驛路恙なく故山

に歸りて後信心のともから件の米の残れるを

請ひ求め信をなしていたきければ靈驗あら

たにして忽ち佛舍利となり或は飯粒より

125 光を放ちければ是を見て發心する者かそへ

かたし

〔絵⑬〕

既に明願は大智妙權現の御利益にて寶滿

大士の靈告を蒙り生身の地藏薩埵に値遇し

奉り年來の所願成就しぬれば信心いやまし精

130 修勤行おこたる事なく身は常に住馴し大

山の寂室に座すといへとも心は遠く吾妻の

岩船に遊ひて事とふ人の面影も今や尊像

の影現かと疑れ峰の嵐澗のひきも只微妙

妙の説法かとのミ聞えければあるにあられぬ

135 心地して又翌とし初春の頃再ひ岩船山へ

と志しはるく来りて山の麓に至りこゝ

かしこと尋ね見れとも草木そうもくのしけれるまでにて

去歳きょざいの秋やとりし菴そうも見えず主ぬしの法師

おハさねは明願めいがんは唯忙然たぐぼうぜんとして立たる所ところに一人の

140 老翁杖らうじやうにすかりて来りむかふ弘誓こうぜい嬉うれしく

思ひて有つる事を語れば老翁らうじやう答こたへて吾此郷われここに

久しく住むといへともかゝる事は曾まづてしらす

御僧ごそうの深心佛意しんしんぶつぎにかなひ給ふならん何なにの

うたかひか有へき爰こゝにむかひに當あたる山の古

145 松の下に草堂そうだうあり曾まづて其草創そうじやうをしる人

なし本尊ほんそんは自然涌出しぜんゆうしゅつの地藏尊ぢざいそん靈験れいげんあら

たにして信しんあれば其利益そのりやくむなしからず拜をがミ

給たまへと云おほりてさる弘誓翁こうぜいおきなか語るにまかせて

たつね至りて本尊ほんそんを禮拜らいはいし麓ふもとに下り

150 郷里きやうりの老若らうじやくにかたりければ皆みな奇異きいの思おもひ

をなしますく信仰しんぎやうの人ひといてきにけり

〔絵⑭〕

右の御縁起ごえんぎは往古むかしより當山とうざんに傳有つたて天和年中てんわちゆう江州三井

寺沙門良觀らうくわん僧都そうとの續編ぞくへんせる地藏靈験ぢざいれいげん記第九卷きだいくわんにも

あらまし是を記しせり

155 是より次の段靈験利益れいげんりやくの品しな々は當山とうざんの記録きこくに傳へし

事或ことあるは口碑くつひに傳へて今いまに其跡そのあと残りし事こと又は近來きんらい

まのあたり見聞けんもんせし不思議ふしぎの事ことともをあらまし筆記ひきし

て後の世のちのよに傳つたるのミ

此本尊このほんそんのあらたなるにより一宇いつう建立けんりつの志ししを

160 發おこして近ちかきあたりの農民のうじん僧俗そうじやくにいたるまで

寸竹尺木すんちやくせきぼく数かずくもち運こふ事こと山の如ごとし竹木

すてに足りぬれば工匠こうげいあまたあつまりてほとなく

御堂ごだう建立けんりつ成就じやうじゆせり頃ころは寶龜年中ほうきづねちゆう僧坊そうぼうを

あらため入佛にりぶつ有あて此時このときより初はつて岩船山蓮花いわふねざんれんげ

165 院高勝寺いんこうしやうじと彌やせり今の本堂ほんだうに安置あんじし奉ほうる

本尊ほんそん是こゝなり斯かくて明願めいがん律師りつしんはミづから我われか

影像えいざうを彫刻てうこくして本堂ほんだうの傍かたはらに安置あんじし諸人しよじんに

尔しかして曰いは我われ永とこく龍華會りゆうげを期もちして此峰このみねに

とまり末世ごせの衆生しゆじやう此山このやまに歩あを運こひ本尊ほんそんを

170 瞻禮せんらいし一念いつげん信しんを生なする者ものあらは皆是こゝを記しして

安養國裏あんやうこくの再會さいかいを得えと唱となへ畢はりてかき消くす如

172 失給しつじやうひ再またひ行方ぎやうかたをしらすなりぬ

〔絵⑮〕

岩船山地藏菩薩縁起 第三 (題意)

001 當國下高嶋村に地藏田といへる田ありむかしいつ

頃といふ事はしらす地藏尊牛の鼻綱はつなをとり給

ひて耕作するものゝ助力とならせたまふさりながら

田面のひろさ四反歩一つかねとて菩薩の艱難かんなんなされ

005 たるよりいひ傳ふとかやそれより後地をわけて一反

四畝一おさとやらんにて畔境くわを立待れとも不思議に

くろさかひ立かねぬるよし田のぬしは若葉惣右衛門と

云ものなり此跡本尊の擁護し給ふにや毎年

耕作水旱の障もなく五穀成熟せる事幾としか

010 農民安堵のおもひをなすこれによりて毎年正月

四日の夜御堂にて護摩修行の上民家へ種たねかし

をいたし明年の正月返納する事常例となりぬ

〔絵16〕

人王九十五代 後醍醐天皇の御宇元應年中

上野國新田太郎義貞病難を當尊へいのり

015 たまふに則祈願成就して平愈しければ参詣

通夜して供料式十石を寄附したまふ

當國富田村和久井藤兵衛と云もの難病をうけ當

山へ詣て祈るに御鏡餅を備へ奉れと御告ありし

より信心肝に銘し則御鏡餅を備へ奉るに難病

020 たち祈に平復しければ夫より已未としことの

正月かならず備を捧るにいよ／＼家内安全にまも

らむと霊告まし／＼今に其ふしきを残し給ふ

〔絵17〕

人王百十一代 後光明院の御宇正保年中其

頃の住僧心さしふかく本尊を供養し奉る事

025 おろそかならず一夕夢中に此山上にて百萬遍の

佛名を唱へ称名念佛永く絶さらしむへしと御告

を蒙りあらたに一字を造立して常念院と號し

不断念佛を開き今に不退の道場となる事ひとへに

尊像の靈威いちしるき故なり

〔絵18〕

030 人王百十五代 中御門院御宇正徳年中當國

朽木町に異名を念佛加兵衛と云けるものつね／＼

佛道にこゝろさしふかく地藏尊を信仰する事

他に異にして年久しく怠らす或時願望ふしきに

成就し侍れば猶又地藏尊の御名をとなへて一七日

035 の間地藏念佛と名つけて六七歳はかりなる

童を催し昼夜すゝめけるに志し有ものは聊の

財施ざいせを捧る故則岩船山へ納め奉り其餘分にて

石地藏尊を建立し供養す其志しを感じて在く

祈く町々まで誰も皆こそりて唱へ奉る夫よりして

040 國々へもひろまり地藏尊の縁起をうた念佛に

つくり鉦太鼓つゞみ其外種この鳴物なりものを集め思ひく

心く／＼に念佛を唱へ奉る事になりぬ

〔絵19〕

地藏念佛これより流布して近國他国までもて

045 はやし種々の物真似まねなどして岩船山の地藏念仏

と名つけ寄進の施物を當山へ捧げ残る所ハ村々に

銅鐵木石の類にて尊像を造立し毎日貴賤男

女袖ひらみかへを翻し參詣す又月この十八日廿四日にハ當山へ

近在遠境をわかつたすまふて來て病難消除をい

のるにかなはずといふ事なし

〔繪20〕

050 享保改元丙申の頃堂舎大破に及びし故再さい宮みやせん

ことをおもひ立けれども自力にかなひかたくて現住の

僧も時節を待居たる所にいつともなく僧一人所々にて

材木をととのへ岩船山と札を付置ぬるに誰引よするとハ

なけれど所々の材木皆當山へ寄來れり其材木を

055 調へたる沙門は當山よりは出さりしに何いかなる者やらん

と疑ひはれやらす若や地藏尊の現したまふにやと

人々感し傳へし又平地を百四五十人ほとにて引

なつミたる材木を嶮けしき山坂を百人にもたらさる

人数にて引あくるに流に下る船の如く容易たやすあかる

060 事更に人力のなすわさならずと諸人いよく感涙を

催し信心肝にこたへたり爰に又當國富田村の者

とも三十人はかりして輕き材木を引上來れりかゝる

時にはいつとても開帳をねかひ拜まゐ奉る例なる

うへかれらも希ひし故則戸帳をひらきしに尊像

065 曾て拜まれさせ給はず其中一人の男我のミひとり

おかミ得ぬ事よとなけき罪業の程もはつかしく

泪なからに庭にたゝすミけるか餘り不審はれやらて

其中に疎からぬ丈にひそかに語るに其男も拜し

奉らすと答ふ是を聞てたれかれも皆拜む事を

070 得さりしと詞をそろへて懺悔ざんげし歎きあへりかゝる

所に念佛堂の方より僧一人來りて云けるは

唯今山上へ大木を引上れとも人数すくなきゆへに

中々動かしがたし各も力を添てたひてんやといふに

皆くやすき事なりとて人数に加はり難なく引

075 上ければいつものことく開帳有しにはしめおかまさりし

人こもありくと拜たてまつりて始よりのあらましを

かたりけるに各寄異の思ひをなしさきに見えたる

沙門は定て本尊の出現ましくと力を合せたまふ

ならん又はしめにかたくの拜ミ給はさるは地藏尊我く

080 に力を添へたまふとて御厨子の内におハしまさぬ

ころにても有つらんとてかた見に語あひ随まはし

弥信心わたくしなく皆感涙袖をそしほりける

〔繪21〕

當國柳田村は日蓮宗のミ多して餘宗ハわつか

八九人ならてハなし然るに地藏念佛所々にて興行

につき此村にても何とそ企たき事なりとて大工八

右衛門といひける者勸進の本主にて念佛をはしむと

いへとも僅わづかの人にて賤施もあつまりかね石地藏も建

立しかたしとて各菩提所へ集り念佛興行も今日

限りにて今まであつまりし施物は岩船山へさゝけ申

090 へしとて他念なく寶髻を唱へける中にも八右衛門

音頭なれば一心不乱にとなへけるか如何なる故成覽
俄に卧して息絶ぬれば有合ふ人と肝を消しなくく
なきからを葬りけり

〔絵22〕

095 斯て八右衛門頓死せし後其村の若きともから当山へ
まふて本尊を拜しそれよりあなたこなた見めぐり

普請場なとまて見ける所^所に彼頓死せし八右衛門まの
あたり働^{はたら}き居たり若き輩目を見合せさても世にハ
かほとまて面躰の似たる者の有ものかなと云あへりし

100 か餘りに不審はれされはいさや尋て見はやとて八
右衛門にてハなきかと呼^よければ誰^{たれ}そと答て人々を

見て各よくこそ詣て給ひつれといらゐせしにミなく
おとろきあら心得ぬ事かな和ぬしはいつくの頃念仏
唱へなから身まかりたる人の今爰にある事夢にてや
あるらんとかたれば我死したる覺えさらになしいつ
そや各と念佛となへ居たる所へ岩船山より御僧

105 一人來り給ひて山上の普請いそくといへとも工匠
すくなき故いまた成就せず汝今より此山に來りて
助よとありし故直にともなひて至り見るに普請

110 いまた半^ななり今日より四五十日はかりか程ハ宿^{やど}へも
かへるまし跡の事ハ頼ミ侍ると云てわかれぬ
皆々疑ひなから急き柳田村へ歸てかれか墓所
を掘發し見れば八右衛門か骸はなくて御袈裟

一丈残り末世の寄特佛法の不思議ありかたき
事言葉に及ひかたし

〔絵23〕

115 さて昔の御堂より後の山を切おろしぬるに

四方より貴賤老少にかきらすきそひ來りて念
佛して手々に土を運ひければ、忽^{たちまち}地形も成就し
享保六年御堂も造畢し並に大佛千躰護

摩堂山王社稻荷辨賤天宮其外数々の堂社

120 残る所なく建立せり然れとも寶前に額のなき事

を任持朝暮こひねかひしにはからすも翌としの

秋彼岸にいたりて當國寒河郡下河原田村神山氏

病氣本復の願望成弁せるにより額を捧げ奉んとて

其頃佐々木玄龍子とて七十三歳になれる人當時能筆の

125 譽有し故此額字を乞求めて今寶前に掛奉りぬ

〔絵24〕

岩船山地藏菩薩縁起 第四 (題意)

001 かく靈験日々に新なりければ遠近の男女参詣の

道俗ますく多して御戸をひらき尊容を拜せん事を

ねかふやから日ごとに五度三度に及へり然るに享保

八卯のとし六月十三日より十五日まで開帳を願ふの

005 もの一人もなかりければ如何なる故ならんとあやしミ

思ふ折から十五日未の刻頃上総の國の者なるよし

にて七八人伴ともなひまりて開帳を願ひしにより住持

謙盛寶前におゐる例のごとく其作法を修し御戸を

ひらかんとせしに御厨子は常の如くなから本尊は

010 まします謙盛甚たおとろきとりあへず彼参詣の

輩に對していひけるは當山本尊の御事ハさためて

かた／＼にも聞及ひぬらん靈験あらたにして年こかゝる

事侍りて因縁うすき薄き輩は何程開帳懇望ありても

尊容拜まれさせ給はぬ事ま間まこれあり各にも因縁

015 薄き面々と見えて戸帳ひらきかね候得は此度は

枉まげて下山候得と宥なだめて歸しぬ

〔繪〕

抑宮殿嚴重にして御戸のしまり御厨子の有様も

常に變る事なければ人の取出し奉るべきやうもな

しといへとも若や盜賊の所しわざ為にてもやあらんと謙盛

020 これを歎き御行衛を尋ね御ありかをもとむる事

日夜をわかたす近きあたりハ更さらなり遠き國の山

林まで人を走らして尋奉る事ふたつき二月餘りに覃およへ

とも爰にましますと云おと音信もなく住持進退究て

諸天に祈り歎しに其年九月朔日の夜夢中に

025 本尊影向石御船岩の上に立せたまひ光明十

方を照し謙盛に告て宜く是より南の方

海邊の有情世渡る業とは云なから旦暮あけくれつた

なき殺生をのミいとなミ我に因縁うすく一毫の

善種をも植ふる事なく唯造たぐさうあく惡のミに日を送れば

030 後の世永く沉淪ちんりんせん事を悲しミかれらを濟度

せんために海邊に至りて多くの衆生に縁を結ふ

なりと宣ふと夢見てければ夙とに起て彼影向

石に至りて見るに苔むし露むすへるのミにて

其験しるしとてもなければなく／＼歸りてさもあれ

035 ふしきの夢を見つる事よと思ふにつけてもいよく

尊容の御ありかを慕したひて歎き居たる所しに其朝

辰の刻頃常陸の國の者のよしにて一人の男参詣

して院主に對面ひまかし密に物語したき事有よしを

云ものあり何事にかといふかしくて則面謁せしに

040 彼者申けるは某事ハ當山御本尊の靈験を

蒙りし事ありて報恩謝德のため又は往生浄土の

夙願侍る故當年まで七年の間怠らす廿餘里を

遠しとせず月毎に一度は歩を運ふ者にて候

然るに當夏の頃よりさかなき世の浮説に當山の

045 本尊はいつちともなく飛せ給ひて此所しにハまし

まさぬ故日夜たつねもとめ給へともいまた御行衛しれ

させ給はぬよし區まくに申ふらし候實にてもや

候覽然るに此ほとほのかに承りしハ下總国銚子と

やらんにて岩船地藏尊開帳有て参詣の諸人

050 群集せるよし慥に聞及びて候へは彼國へ人をやりて

たつね試したまへかしとかたりければ昨夜の靈夢に

符合せし物語謹盛信心肝に銘し雀躍歎

喜する事限りなく則才子覺成坊にめし仕ふ男

二人差添下総州銚子邊へそつかはしける

〔絵26〕

055 覺成坊昼夜三日を歴て下総国に入爰かしこ

にてとひ聞に告來りし人のいひしに遠ふ事なし

急き至りて見れば銚子より一里餘近所にて

海上郡三宅村地藏院と云へる真言宗の寺にて

開帳有参詣群集おひたし覺成坊すなはち佛

060 前に詣て拜し奉るに年来朝暮拜し奉りし本尊

なれはいかてか見ちかへ奉るへきまかふ所もなき尊容

なれば住持に對面してしかくの趣を語り本山へ

還坐げんざなしまし度よしこひ求む住持則其村の

役人なと呼集よひあつめて云やう和僧の宣ふことく岩船

065 山の本尊にまかひなき事ハ此方にも其しるし

待るとて始よりのあらましを語りしは當夏六月

十二日の夜年の頃十七八はかりの僧一人來りて

云けるは我此地に因縁有て來れり門前に

見えたる二間四面の堂に暫時の程寓居し度

070 よし望まれし故いと易き事なりと許諾せしと

夢見たりしゆへ不思議なる夢を見たる事よと思ひ

翌十三日の曙に地藏堂に詣見れば壇上に威

靈の尊像御足の下に古き折敷をしきて立せ

給へり其折敷を見れば下野州岩船山宝前

075 と記してあり嗚呼おもひよらざる事かな昨夜

夢見し客僧は此尊像にてこそましますらめ

去なから如何なるわけともはかりかたければ異人

には此事かたるましと思ひ直に尊像を自坊に

移し秘し置て曾て人に知らせさりしにたれ

080 告るともなく此事を尋る者ありし故空事なりと

こたへしに近き里くの男女或は夢に感し

或はたしかに聞しなとこゝろくに尋ね來る事

やまさればさのミハつゝみかたくてあらましを語り

ければしからは未曾有みぞうの因縁なれば開帳して

085 我等こときの罪ふかき衆生に善縁を結むすはせ

たまへと村々よりしきりに懇望するゆへ止事やむを

得ずして今月十日まで三十日開帳せしめ候也

誠に岩船山は日本の伽羅陀山にて自然涌

出生身の尊像靈驗あらたなる事隠かくれなければ

かゝる奇持の尊像を邊土に久しくとめ奉る

事ハ其おそれすくなからず候得は懇望たまふに任て

還し奉るへしと速に領掌ありける

〔絵27〕

斯かて九月十日まで開帳事故なく終りける故

105 同月十七日本尊彼寺を御發輿なりければ近里の道俗わかれをおしミ奉りて悲歎する聲むかしの

沙羅林雙樹の悲もかくやと思ふばかり也道の程七八里はかりは老若手々に鉦太鼓にて念仏宝號を唱へ絶す送り奉り驛つたひ四日にて井日申剋頃

當山本堂へ還坐ならせ給へり近里遠境の庶

100 民よろこひ拜し奉る事限りなし誠に經にも遊

戲十方度脫衆生と説せ給へはかゝる利物は

おはしますへき事なれと末世濁惡の世界現在の不思議ありかたき事ともなりと見聞の道俗感歎随處し奉りけり

〔繪28〕

105 安置し奉る本堂の瓦破壊に及ひぬ其頃の兼

帶住持智洞良然の两大僧都相ともに是を愁ひ

永々不朽ならしめんため銅瓦にてふくへしと志願淺

からされとも自力におよひかたければ江戸におゐて

六十日の間開帳の事を 公所に願ひ奉り速に忍

110 免を蒙り享保十七年子の四月朔日より目黒不動尊

の境内にて開帳せしむ老若男女參詣群集種々の

靈驗利益其数多く兔毫とがうのおよふ所にあらず其中に

四月井日頃より誰か云出せしともなく江府の内巷に

此度岩船地藏尊目黒にて開帳有し所しに本尊は

115 このほと岩船山へ歸らせ給ふと流言ありければそれ

より詣て来る人も稀に成けり扱もかゝる無益の

風説いかなる者か申觸せしといひあへる折節同月井四日の朝岩船山より羽檄うげきをもて井二日の申の剋

頃本尊紫雲に乗給ひ本堂へ歸り入らせまし

120 ますよし告來りしにいま其文も見はてぬ程に

又飛脚きたり井二日暮時過に入らせ給ふ本尊うせ

させたまふと告來り世上に云觸せしふしきの

風説其驗しるしありて凡慮はかりの料り知へき事にあらず

本より開帳場の本尊は始終巍然きぜんとしてましく

125 けり尊像猶かくのことく神變の應用ましませは

涅槃圖像に三身を具すといへる祖師の明訓

いよく信すへきことなり

〔繪29〕

又廿四五日頃より晴れ曇りのわかちもなく日々

參詣群集しけりさて詣て来る人本尊の御面貌

赤色と拜せし者もあり又は金色白色黒色と

品々におかミ奉る諸人たにあらそへり誠に事識の感

見人々不同成るへし利益多き其中に目黒境

内に年久しく壁ひざりの乞食有身の程の淺ましきを

悲しミ前の世のむくひも歎かしく唯後の世を

135 助らんことを思ひて信心皈敬淺からず毎朝滝

にて洗浴し業障を懺悔しひたすら極樂むねを

祈求する外他事なし斯て三十日程経ければ歩

行起居少もとこをりなく常の人の如く自在に

なりぬ現世の利益既にかくあれは往生浄土の誓
約もむなしからしと見聞の人々皆随岳の泪袂を
うるほしける又中橋邊に鈴木大和といへる陰

陽師あり夙願の事ありて参詣せしに信心実

ありて感應道交し直に生身の尊像を拜し

奉り今世後世の大願成就せりとて其業を

145 其子に附し自ら石にて尊像を彫刻して淺草

金龍山寺中智光院の門内に安置しけりその

外の靈験一々記するに違なし

〔絵⑩〕

同閏五月九日目黒御發輿にて東叡山本院へ

入らせられ 准后一品大王御拜あらせられ其夜は

150 惠恩院に御止宿翌日御發輿ありて十一日岩槻

慈恩寺へ入らせられ十日の間開帳畢りて廿二日

御發輿にて井四日未剋頃山下まで還着し給ふ

此日大空も快く晴て曇りなしいつくともなく

音楽聞えて参詣供奉の道俗たしかに聞し

155 人もあり又常ならぬ響なりとて驚く輩も有し

とかや坂の上御袈裟石の邊より白色の天花

乱墜し時ならぬ雪かと疑る地に墜しは忽ち

消しかと清き昏などにて請とめしはとまり

又は木の葉なとにとまりしを諸人あらそひ

160 拾ひ得て信心の者は一心に頂禮恭敬し

護持せり信心うすき者の所持せしは程なく

消えてうせしとかや

此としの秋本堂残らす銅瓦にふきかへ奇麗の

壯觀残る所なければ庶民の信心いやまして靈験

165 ますくあらたなり

〔絵⑪〕

寛保二壬戌年兼帯住持權僧正良然年來の志願

にて三間に五間の樓門建立成就し密迹金

剛の像を安置せり

翌癸亥年四月朔日より兼帯住持常玄三王門

170 建立供養の法事を遂行ひ三十日本堂に

おゐて開帳せしむ近隣は云に及はず他国遠

境の道俗叅詣群集して道もさりあへす其中

靈驗利益を蒙るもの其数多し上州太田の郷の

者とかや六歳の男子を抱て参詣し御船岩に

175 のほりしかあやまちて其子をとりとせり断崖にて

岩石峨々と聳五六丈築上たるかことく其さま刀の如く

劍に似たり草木の生へき便もなく中々人足の至る

へきにあらず禽も翔かたき所なれば人々周障騒げ

とも力なく徒に岸下をのそみ見れば二丈斗

180 下すこし張り出たる岩の上に小兒とまりて

聊恐るゝ氣色もなく安然として居たり各杖よ

梯よと立騒く間半時はかりときうつれとも

更に啼聲もなしからうして竹階子など持來り山

間に道を覓深谷に分け入石より岩につたひ岩より

石に梯してやうくと抱き得たりしに身体少も痛所なく平生の如し偏に尊像の加護にあらずはなんそ身の全き事を得んや皆人蕪生したる心地にて甚悦の感涙とくめかたし誠に常情のはかる所にあらず

〔絵32〕

此月の晦日まで開帳畢り其夜より三日昼夜大雨滂沱たり閏四月朔日の夜戌の頃より本堂宮殿の内にて御誦經の御聲ありて緩ならず急ならず低からず高からず堂の内にて拜聴せしも二三町ほど隔たりし所にて聞しも其御声

高低清濁さらに遠ひなし朝夕の剋頃に御聲やミけりかゝる事はむかしより時こ有事故今に毎月十七日廿三日の夜は遠近の老若男女御經拜聴せんとて通夜する輩おひたしく念佛寶獅の声やむ事なし其中僧俗にかきらす因縁厚き者はたしかに拜聴する人もあるよしいひつたへ侍る

〔絵33〕

つたへ侍る

岩船地藏御影三休



孫太郎尊御影



(宮島コレクション蔵)

岩船山地藏菩薩緣起 第五 (一題發)

- 001 寛保四甲子<sup>此年二月廿九日
延享と改元有</sup>山上堂舎修復為に開帳の
事 公所に願ひ出しに三十三年未滿にてハ免許
なりかたき掟たりといへとも別段のよしにて願ひの通り
公免を蒙り二月十一日より八十日の間江戸湯嶋
005 天満宮社地にて開帳せしむ此年正月水戸從三位
宰相宗翰卿の祖母養仙院屋公より御紋付白地
錦の戸帳一掛御寄附の上庄嚴のためとて御紋付
紫の御幕二張御貸下さる薩州大守中將継豊卿の
010 簾中竹姫君より紅地錦の七條御袈裟を獻せ
られ御めし替あり其上御紋付赤地錦の戸帳一掛
寄附せらるる二月三日御發輿にて驛つたひ四日の
間宿と村この貴賤男女まねかさるに集り供奉し
送り奉り六日未剋頃湯嶋の開帳所へ入らせらる
此日供奉の道俗男女雲のことく霞に似たりかく見
015 聞の輩ハことく本尊の引撰利益にあつかりなん
いとくとふとく覚えけり
開帳中諸人の渴仰前々に倍し日々の参詣いや
ましなり紀州從三位宰相宗將卿尊崇あさ
からす御紋付紅地錦の七條御袈裟一通り嫡男
直松君より同しく一通り簾中富宮□□ならひに
御部屋方より一通り宛都合四通の御袈裟一箱に
入寄附せらるる三月并三日御めし替ありて諸人に
是を告しらしむ
- 025 湯嶋近所三組町西村作左衛門妻とめといひし
平常神佛に皈敬し特に當尊を渴仰する事
よのつねにこへたり然に過去の業因にやことし三
歳になれるひとりの女子正月の末より痲瘡を煩ひ
二月十二日八時終にはかなく成ぬ父母の悲歎譬るに
ものなしといへとも歎きても歸らぬ道な□は今はさハ
030 霞説童女頓證菩提の為當尊へ祈り奉るより外は
なしとて夫婦もろとも開帳場へ歩を運ふ事毎日
数度限りなし夜半にハ別して觀念し夙に起ては
禮拜して餘事を絶たりし三月四日の七時頃妻一人
035 参詣しまつ燒香場にて一炷の香を拈し居たり
しに香爐の側に年の程五十歳はかりの僧薄き
黒紗の衣に金襴の袈裟をかけて居たりしか
群集の中にて其妻の名を呼て其方ハ先月三
歳の女子に離れ夫婦の歎きおしはかれりと宣し故
嬉しくも訪はせ給ふものかな如何なる□方にて候得は
040 かほと群集の中にて有難き御尋に預りし
訪はせ給ふことく獨の子にはなれ父母の歎きやる
かたなく御思召しやり給り候得と答ぬれば此所に
暫時待候得と有しゆへ相待居たるにしはらくありて
白色の系を携^{たづな}来らせたまひ是はこれ本尊
045 御手の系なり汝か志の實を感じ引切て與る間
深切に念し候得と尔し給ふ誠に有かたき御志し
頂戴仕候と御礼を申述へ御内陣へ入り本尊を拜

050 し又焼香所に來りかの御僧へ猶も御礼申上なんと
思ひ尋しに其御僧は見えさせ給はず爰やかしこと
尋ねめくれとも行方しれされは日を経て毎日夫婦參

詣してたつぬるに終に尋あたらしり然るに其僧
形曾て外に見る人なしおもふに其妻の志深重成故
生身の尊像現し給ひいよく信心を勧めたまふもの
なるへし右の系を諸人打寄て拜するに潔白けつぱくにして
絹糸にもあらず麻あさいともあらて蓮の絲に似
たるよしを申あへり

〔絵34〕

060 夫婦の者一心精進の感する所生身の尊像に値遇ちぐ
し證しるしの絲を授かりしにより信心ますく増長し
けるに不信の輩何の絲なりやおほつかなきよし
申ふらしければ夫婦も傳へ聞て凡心の淺間し

065 しさ少し疑ひの念生しける然るに又井一日の夜
夫婦もろとも同じく靈夢を蒙りけるはさき
頃焼香所にて値遇せし御僧枕上にたゞセ給て
志願成就のしるしに白色の絲をあたへしに不信の
輩の言語を傳へ聞うたかふ心のきさす事宜しからず
必ず疑ふ事なかれと示し給へり夫婦夢さめて
おとろき恐れ則參詣して寶前にて發露懺悔

070 し信心いよく深く成りぬ猶更毎日夫婦參詣する
事或は三度或ハ五度怠る事なし彼糸を少し
はかり受納したきよし常玄懇望せしによりて

二寸ほと二筋與へたりき其後常玄彼夫婦の者に
逢て委しく尋ければ夫婦の者の曰童女去年
二歳なりしか夏の頃より母と同じく三寶に

075 皈依し朝夕地藏の和讃又は寶號をととなへ
或時は観音三十三所の詠歌を暗誦し所々の
神殿佛閣に詣て侍る事成長の人に超たり病に
染るの前日まで當尊湯嶋へ入らせられ候事を待
かね落涙し近所の靈雲寺へ乳母とともに
參詣し庭に立せたまふ地藏尊を伏し拜ミ三繞

080 して歸しよし十二日の朝も母の膝の上にて御開
帳所へまいりたきよしひたすらに願ひ歎く故頓て
快くなりなは參らすへしとすかしければ病氣本復
までハ遅く候儘ミつからはいま參り候なりといらゐして
其後は言葉もなかりき八時過本尊の御供を申
うけて與へければ三粒いたゞきは是を服して息たへ
たるよし委しく語るを聞て思惟するに正しく

085 本尊かりに孩児とあらハれ給ひしかも早く身
まかりて父母にいよく誠の志をすゞめ給ふ廣大の
方便なるへし

〔絵35〕

090 此度の開帳中もまた靈驗利益ますく多かり
し中聊七八事を記して末の世に傳るものなり
湯嶋天神門前天満屋善次郎妻名はしをと云り
常々尊像を信仰する事淺からず然るに初春の

995 頃より心地例ならず日にしたかひ病に染み鍼薬も
驗なく弥生の初方より枕もあからず飲食も絶

ぬれは親戚打寄り歎き悲し露の命の消なん
事をおしミ今／＼となりて時を待はかりに成ぬ十一日の

夜丑ミつ頃病女夢にも非す現にもあらず尊貴の
人にむかひて應對する躰はしにて送迎の

100 會釋まで残る所なし暫時有て夫に告て云けるは
扱も身にあまりて難有貴き事の候ものかな昨日の

夜岩船地藏尊此穢しき病牀に入せられまの
あたり告給ひけるは汝此度の大病定業必死の

105 かれなしといへとも尋常篤信の志弛されは
命を救ひて得さすへし努／＼疑ふへからず唯

至心に我を念する事怠ることなかれ又あすの
夜八時に来んと宣ひ帰り給ひぬ今朝此事を

人々にも語らむと思ひしかとも不信の輩ハ却て
謗を生し罰を蒙らん事を恐れて語さりしか

110 誓約にたかはせ給はす今夜又入せられミつからか
左の手をなてたまひ夜明は快氣すへし此

供米をいた／＼くへしとてあたへ給ふ故ひとへに
有かたく御礼を申唯今歸らせたまふ御跡にて

115 ひとりの手を開き見しに柔なる精白の御供
二粒掌の内にこれありとて人々に見せければ有

合ふ面々感喜の涙おさへかたく餘の不思議故
家内の者は云にも及はず近隣の輩まで呼び

あつめて拜せ頂戴しける今まで枕もあからさり
し病女他力もからずしてひとり起居し食物を

120 請ひけるゆへとりあへず飯を與へければ快く喰て
けり其日の昼過にハ起居自在になり家内歩行も

病る者のやうにも非すほとなく平愈し翌日より
開帳場へ日毎に詣て拜ミ礼し奉事怠らす

〔絵36〕

下谷長者町二丁目和田清右衛門と云男初春の頃

125 より難病にかゝり陰囊夥しく腫れ苦痛堪

かたく二月中旬より飲食も絶ぬれはあまたの醫

師も術つきて必死と見えければ七旬におよひたる

其母歎き悲しむ事限りなく當尊へ祈誓し

けるは老の身の消なん事露おしからず何とぞ

130 大悲の方便にて我子の命にかへさせ給ひて憂苦を

たすけましませとせちに祈り誠を開帳へ参詣

し御袈裟の切を懇望し歸りて病者に其

趣を云聞せ一心に祈念せしに痛所破れ膿血

なかるゝかことく苦痛忽ち忘れ掌をかへすか如く

135 平復しけり

同所一町目何某か母としころ眼病を煩ひ近き

頃は黒白の色も見えわかぬ程成しか日參の志

願をおこし御供をいたゞき献備の御茶を申請て

眼をあらひしに忽に明らかなり平愈しけり

140 筋透橋中町河内屋平七悻善六といふもの當年

十六歳なり目の上に贅のこき腫物あり良醫
を求め種々療養せしかとも其驗もなかりしに
二月六日本尊湯嶋へ入らせられし日より開帳の間
日参の願を發し祈念せしに四五日過て腫物
自然と平愈して其痕あともなし信心いやまして
家内の者もろとも日々にあゆみをほこひ敬礼尊
崇おこたる事なし

〔繪②〕

湯嶋天神女坂下小道具屋平七裏店に夫ハ治介
妻はかねといふ者あり夫は日々に物を荷ひて
買賣し妻は櫛の葉など賣て貧しく世を

渡りける者の子に伊之介とて當年十歳に
成るまで雙足立かね歩行もならさりければ
其母常々信心淺からず當尊に皈敬し開白の
初日より毎朝参詣し櫛を一兩枝つゝ撃して我
子の業障消滅病難消除を祈る事他念なかり
しに十餘日を経て伊之介脚の屈伸くつしん自由になり表の
石坂嶮しきも木屐にて往来し日々朝夕おこ
たらす参詣しけり

土屋家に側近くつかへし長谷川彦右衛門とて當年
二十六歳の男去冬の頃より兩耳全く聾こて氣力も
おとろへをのつから飲食も絶くくに成ければふたりの
親を始めうとからぬ者の歎き少からず此男常々
信心も薄からさりければ當尊の靈驗利益あらた

なる事を傳へ聞四月二日に開帳場へ参詣し一七日
参拜の祈念をいたし歸りしに翌三日より鐘鼓の
こゑなとほの聞へそれより日々に聞る事近くなり一七

日成就せる八日の朝より密語にても聞たかふ事
なく全く平愈せしにより偏に當尊の利益なる
事を感じて信心堅固になり則湯嶋門前にて身
軀を洗浴して百度まいりいたし住持に對面して
感涙を流し物語をなし十念をうけて歸りそれ
よりいやましに参詣念る事なし居所は本所

扇子橋邊土屋氏の下屋鋪の内なるよし

〔繪③〕

本所石原多田の薬師のとなり常陸屋四郎兵衛男子
五郎吉當年十八歳なり二月廿五日より煩ひつき腸
滿の大病になり日にしたかひ衰おとろへて四月十一日の夜ハ
既に今ハの際きわと見えぬれば鍼藥しんやくを播ほすに便り
なかりき其父四郎兵衛年來地藏尊を信仰せし上
殊に當尊の利益あらたなる事を思ひ願を發して
翌十二日の朝寅に起て前なる大川にて七度浴し
夜もはやほのくくと明わたりければ湯嶋開帳場へ
来り百度まいりの志願を發し懇に祈念し

我子の病痾かなにとそ快復なさしめ給へ假令定命
にて必死はのかれかたたくとも暫時苦痛をまぬかれ
極楽往生を遂さしめ給へといと懇に祈念し百度
参成就して急き宿に歸りて見るに病者いよく

210 衰て四時頃さしまりぬれは四郎兵衛なくく一口
ふくめし水を快く吞みおハリねふるか如く息たへ
たり雙親昆才啼悲しめとも歸らされは死骸の

215 枕をかへ置んと四郎兵衛亡子の側によりて何くれと
とりはからふ内に思はずも亡者聲を出しける故

220 四郎兵衛を始め家内の人々驚きながらよろこひて打
寄顔に水なとそきければ眼をひらき父母に

225 むかひて云けるはすてに命終りて冥途におもむき
道の程廿里はかりもあゆみ行かとおもへは二筋の

230 岐にいたり祖父祖母に行逢けりふたりの人訪はせ
たまふは汝はなにゆへに爰に来れるやさそな四郎

235 兵衛歎きかなしむらんなと宣ひてしはしかたらひ
休居ける所へ黒き縮緬の衣を着したる御僧

240 来らせたまひやよやまで五郎吉汝此道を通りてハ
あしかりなん早く我にしたかひこなたへ來れと宣ふ

245 ゆへ彼御僧にいさなはれ此門口かどまで來りける時御
僧の宣ふは汝かすみかハ是なりとて我脊せなかを三度

250 たゝかせたまふゆへ後を顧れば我は是湯嶋の
開帳場より未れるなりとて忽ちかくれて見えたま

255 はすと始終を語りて早く食事を興へ給へとこひ
求めける故粥よめしよとひしめきければ只常の

260 飯を興へよと望ゆへ小盞に飯をもりて興へければ
三盞まで喫畢て氣力も平生の如くなりしはしか

265 程見る内にはれふくれたりし顔も自然と愈て

270 起居もおのか儘にして八半の頃ハ多田の薬師へ母と

275 伴ひ百歩はかり参詣せしよし翌十三日早朝に

280 四郎兵衛開帳場へまふて來て御禮のため又百度

285 まいりをとけ住持に對面して感涙袖をしほり

290 始終を委しく物語して御袈裟の切を乞請て

295 頂戴してそ歸り去りぬ其後十日ほと過て五郎吉

300 開帳場へ参詣し十念なと授り信心いやまして

305 渡世のいとなみ業も心にそます夜となく日となく

310 唯尊容の事のミ憶念し暮しけるかとてもかくして

315 有へきにもあらされはふたりの親に志願の趣を申のへ

320 許容をうけ此年の秋八月の頃形を替へ剃髮染

325 衣の身となり其名を欣心と改ため稱名念佛の

330 行者となれり誠に井歳にもたらてかゝる深重

335 の志し過去咸世々の契りなるかおほろけの因

340 縁にハあらしと聞人随岳し見る人感涙絶やらす

〔絵39〕

345 下谷竹町壺丁目家主平三郎店大工四郎兵衛

350 當國佐野犬伏宿生れの者にて若年の頃より

355 當山へ詣て來て本尊の靈験のいちしるき事を

360 忘れされは此度の開帳にも日々値遇の因縁

365 怠らす詣てしか四月晦日の暮方に参詣し

370 もはや明日は閉帳のよしに候得は明早朝にまいり

375 御いとまこひ拜し奉るへきなと心中の誠をのへて

380 歸りて打卧しける夢に本尊入らせられ四郎

235 兵衛くゝと名を呼はせ給ひ宣ひけるは此家の裏
桜の木の下土中に我か分身の聖容とし久敷

埋れ有汝はやくほり出すへしと御告ましますと
おもふ内に嵐の音に驚きて夢は覚けり

不思議のゆめ見つるものかなとおもひ寅に起て
夜の明るを遅しと寶師を唱へまち居たる

240 程なくほのくゝと明わたりければ靈告にまかせ
裏なる桜の木の下を二尺餘りもほりたるに

はたして御長四寸はかりの尊像泥土にまみ
れてましくけり香水をもて灌きあらひて

245 拜し奉るに儼然として殊勝なる事云はかり
なし則我家に安置し香花を備へ早速開帳

場へ参りまふて佛前にいたり夢中靈告の有
かたき事を御禮申上其後ミつからすこしの

御厨子をこしらへ安置し護持して當山本堂へ
納め奉りけり四郎兵衛若年より値遇の因縁

250 淺からす其志し誠あれハかゝる不思議の御告を
蒙りし事よと見聞の随處限りなし

此外靈告のあらたなる靈験のいちしるき数くゝ
にして岐の説多しといへとも風説傳聞のさたか

255 ならざるはこれを殘しぬ右記す所の七八事は
住持直に其面々に對して委く其始終を尋

問し大槩を記して後の世の信心の族いよく信を
増しめんか為且は當尊の利益靈験餘尊に

超えたる事を知らしめんとして筆記するもの也

260 五月朔日まで開帳八十日遮障なく已剋東叡の
僧侶を延屈し供養の法事をいとなみ閉帳す

此日未剋頃東叡山等覺院へ移し入奉る十九日
まで御逗留

265 翌二日紀州宰相宗將郷椋町の館へ屈請せられ
拜有此時伽羅木をもて新に佛工に命して

彫割せられたる地藏尊像一躰ならひに延命
地藏經一卷本願經一部自ら外題を書し

別紙に志願の旨を自筆に染て奉納し永く
當山にとゞめらる三日東叡山の本院へ入興

270 一品大王御拜あらせらる七日水戸宰相宗翰卿
の祖母養仙院巨公駒込の亭に請し迎へられ

此日は門をひらきて家中の老若はいふに及はず
往來の男女まで參詣をゆるし拜せしむ尼公

拜禮の間に白色の佛舍利一顆を感得せらる誠に
尼公常に三寶を尊崇し昼夜朝暮に佛

275 菩薩の聖容を瞻礼し供養する事常人に
超え殊に當尊に皈敬せらる一心至誠のこゝろさし

むなしからす未曾有ふしきの感得ありかたき事
ともなり右佛舍利感得の未由を筆記し永く

280 後の世に傳へん事を懇望し給ふに付常玄その
趣を記して是を呈しぬ十日水戸宗翰卿小石川の
館へ屈請し拜せらる

十九日等覺院より御發輿ありければ府内遠

近の道俗男女板橋驛又は戸田川の邊まで

供奉し送り奉る事夥く雲霞のことし此日

285 大宮駅御止宿此宿ならひに鴻巣町吉見領の

岩殿山三所に御逗留開帳の中群集の諸人

意願速に成就せしとて随に悲歎の聲見聞

かまひすし六月二日岩槻慈恩寺へ入らせられ十日の

間開帳せしむ來詣の道俗巨益を蒙る輩おひ

290 たし常玄めしつれ候下部の内に江戸下谷村具足町

新助といふ者去月十九日發足の節より瘧疾の病に

染み隔日に寒熱の往來苦痛甚し祈療鍼

藥の功も驗なかりしに當月三日の夜丑三つ頃にも

成なんと思ふころ誰ともしらす年の程五十歳はか

295 りの出家病床へ入らせられ夢うつにもあらず

ありくと告給ひけるは汝はやく袈裟の切をいた

たくへし病苦を除く事速なるへしとおしへらる

新助きるの思ひをなし夜明て其趣を人にに語るに

300 つき早速に本尊御袈裟の切を少しはかり

授け與へければ病者頂戴せしに御告ましませし

如く其日より瘧疾の患もなく平生に復し

けり其外近在の病女一人志願成就速なりとて

さくけ物を備へ日參せしよし其名所をうしなふ故に

305 委く記しかたし十四日下総国幸手駅へ渡御當宿の

道俗男女開帳の懇願しきりなれば黙止かたくて

兩日御逗留有て御戸をひらき拜せしむ十九日

聖州宇都宮新宿町臺陽禪寺本堂へいらせられ

翌廿日の朝より開帳并四日申割閉帳并五日卯剋

310 御發輿此晚壬生町に御止宿領主より昼夜勤番の九六日

富田宿本陣和久井藤兵衛宅御休み供奉の面こへ饗

應あり和久井氏本尊へ因縁有之之往古八時分山麓まで渡御

駒場鷲巢兩村の老若男女ともに御迎として

朽木邊まで罷出申剋頃表坂より本堂へ還坐直に

戸帳を開き諸人に拜せしむ當二月三日此山御發輿より

315 今日まで凡一百四十二日都鄙の御逗留驛路の渡御

聊の遮障もなく貴賤の道俗老若の男女現當の

因縁を結ひ冥願の利益を蒙る者幾許そや挙て

かそへかたし宜成かな遊戯六道拔苦與樂の誓約

誰か是を信せさらん此御縁起を見御利益のいち

320 しるきを聞て一念信を生ずる者は必ず現當の

求願をみてん事努くうたかふへからず

延享改元甲子年八月

兼當山別當職東叡山等覺院

第十五世見住常玄謹誌

325 執毫 北山平洲橋 友雪

326 画工 吉田伯川藤原因定